
G O D E A T E R ~ 二刀持ちし少年 ~

椿姫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

G O D E A T E R ～二刀持ちし少年～

【Nコード】

N 8 4 1 5 V

【作者名】

椿姫

【あらすじ】

G O D E A T E R が小説に!?

主人公「ヒナタ」と「サクラ」、「リュウ」が織りなす神喰いの話
彼らはアラガミの跋扈する世界で、何を望むのか
未来への扉が今、開かれる

1話 少年は、二人の少女と出会う(前書き)

どうもどうも

今度はゴッドイーターに挑戦です

レッツゴー!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!

1話 少年は、二人の少女と出会う

「時は西暦2073年、人型のアラガミ『シオ』によって終末補食が回避され、行方不明になっていた『雨宮リンドウ』が発見されてから2年

二つに関わりが深かった新型神機を携えた二人の少女『アリサ』と『文月サクラ』を始めとしたアナグラの面々は、際限なく増え続けるアラガミ達を討伐しながら、其れなりに楽しくやっていた

しかしあるときから、その平穩は儚くも崩れ去るのだった」

「何不吉なこと言ってるんですか、サクラ」

回想、いや妄想をしていたサクラの頭に鋭いチップが突き刺さる

「何すんのよアリサ、痛いじゃない」

「変な妄想してる暇があったら集中してください。気を抜くと死にますよ」

「うるさいわねえ、たかがヴァジュラじゃないの」

現在アリサとサクラはヴァジュラ相手に戦闘を繰り返していた

「一体なら良いんですけどね・・・あなたが『初恋ジューズ』をこぼすから!..!」

「美味しいのよあれ!!なめんな!?!」

アリサの言う『初恋ジューズ』とは、アナグラの支部長を務める『ペイラー・サカキ』によって生み出された迷走ジューズの事だ。ゴッドイーターたちからは『マズイ』『なぜかそれを持ってるとアラガミが集まってくる』などと批判され、最近じゃアラガミの撒き餌位にしが使われていない哀れな代物。なぜかサクラはそれを愛飲しており、一時は『サクラはアラガミなのでは』などと噂が立つたくらいだ

「あんなもの飲めるのはサクラくらいですよ!!--」

アリサはそう言って高く跳ぶ。意味無く跳んだのではなく、ヴァジュラが発した高圧電流を避けるためだ

「言ったなこのやるお!!いくら可愛いからって言っていていいことと悪いことがあるのよ!!--」

「関係なくないですか!?!」

サクラは『発熱ナイフ』を『レールガン』に変形させ、ヴァジュラのマントを連続で撃つ。たちまちマントが結合崩壊を起こし、直後のアリサの『アヴェンジャー』の一撃で、ヴァジュラは完全に沈黙した

「やった!!--」

「サクラ!!後ろ!!--」

「ほえ?!?!」

サクラが後ろを向くと、別のヴァジュラがその前足でサクラを吹き飛ばさんと振りかぶっていた

(まずい、間に合わない・・・)

迫る前足の衝撃を覚悟し、サクラは目を閉じた

が、いつまでたつても来るはずの衝撃は訪れない

「まったく、それでもゴッドイーターかよ、なっさけねえ」

代わりに聞こえたのは見知らぬ男の声

「.....」

アリスも呆然としているようだ。サクラが目をあけるとそこには
「ん??俺の顔に何か付いてるか??」

サクラの方を見て首をかしげている子供がいた

自分よりも5歳は下であろうその少年は、異形だった

「あなた・・・なんで」

ヴァジユラを一撃で葬った少年。その両手には

「神機を二つも持っているの??」

二振りのショートブレードを携えていた

「ん??そのことは後でだ。下がってる」

その少年は二人をヴァジユラの群れから守るように立ちはだかった

「仕事だ、起きろ」

『さっきやったばかりじゃないか、なに面倒事に首突っ込んでるの』

「いいからやるぞ」

自分の神機に向けてブツブツ言っている少年の後ろから、ヴァジユ

ラが再び前足を振りかぶる

「ああん??」

その一撃を何ということもなく受け止めて、少年は

「邪魔だ、どつかいってる」

ヴァジユラを蹴っ飛ばした

アラガミを構成している『オラクル細胞』を体内に移植することに

よって、神機を操り、アラガミと戦うことができる

その副作用として、ゴッドイーター達は身体能力が上昇する。しか

し、ヴァジユラを蹴りで吹き飛ばせるのはそうそういない

それを少年はあたりまえのようにやってのけたのだ

「そらあ!!--」

吹き飛ばし、また別のヴァジユラに向けてバレットを放つ。変形の

スピードも尋常ではない

瞬く間に二体のヴァジユラが葬られ、残り2体となった

「とどめと行くか!!--」

『はいはい・・・バーストモード、開始』

『スタンバイOK、いつでも行けるぜ』
直後、少年の持つ神機が金色に輝きだし、それを持つ少年は瞬きすら遅いくらいのスピードでもって残りのヴァジュラを駆逐していく

「完了・・・っと」

金色の光が収束して、元通りになる神機。少年はヴァジュラの亡骸を捕食しながら、サクラとアリサの方を向く

「へーきか??お前ら」

改めてみる少年の顔は、非常に整っている

全てのパーツが完璧で、それが顔の上に完璧なシンメトリーをもって配置されている

(・・・それが災いしたのか、女の子に見えるのが唯一の欠点???)
???)かな)

嫉妬心からか、ちょっと失礼なことを思ってしまった

「何変な顔してんだ、なんかついてるか??」

(ヴァジュラの血が付いてるわね)

「・・・とりあえず、ヴァジュラの血が付いてますよ」

アリサがかわりにこたえてくれる

「おお、なんてこった」

「・・・」

乱暴に服で拭い、さらに広げる

「そう言えばお前ら、アナグラのもんか??」

ヴァジュラの血でどっかの民族みたいになってしまった少年は、二人の持つている神機を見てそう聞いてくる

「ええ。私はアリサ、こちらはサクラです。あなたは??」

「アリサにサクラか。俺はヒナタ」

少年、ヒナタはにつこりと笑みを浮かべると、

「とりあえずさ、アナグラに案内してくれないか??さすがに疲れただ、もう最後に支部によったのはいつだったか」

「ずっと外で暮らしてきたんですか!？」

アリサが驚く。今、外で暮らすのは命知らずも甚だしい。というかどんな馬鹿でもそんなことはしない

外はアラガミがあふれているから、そこで寝ようものならたちまち捕食されてしまう

「まあな、大変だったぜ。ウロヴオロスに囲まれた時はさすがに死ぬかと思っただし」

(なんてことしてんのこの人)

素直に思ったサクラ

「一年前にあったあの事件はあなたが犯人だったんですか」

アリサが何かを思い出したように聞く

「あの事件??何それ」

「知らないんですか??アナグラに依頼が来ていたウロヴオロスの討伐依頼ですよ。タツミさんが向かったんですけど、あったのは大量のウロヴオロスの亡骸だけだったって話です。かなり大きなニユースになってましたよ」

「へえ・・・すごいよねえ」

特に興味もないのでそっけなく返すサクラ

くぐぎゆるるる・・・

突然、轟音が鳴り響いた

「!!!」

あらたなアラガミかと付近を警戒する二人、するとヒナタは申し訳なさそうに

「悪い、今の俺だ」

轟音はヒナタの腹の音だったようだ

「あんまり食べてなくてな、えっつとたしか・・・あったあった」
ヒナタがとりだしたのは四角い板の様な・・・いわゆるチョコレートであった

「あ!!それって噂の!!!」

「チョコレートよアリサ、知らないの??」

「ええ、私はずっとオオグルマに……」

「アリサ、ほい」

ヒナタはチョコレートを半分に割ろうとして……失敗、大きいほうをアリサに渡す

「え、でも……」

「良いのいいの。食べたこと無いんだろ?? 食ってみろって」

「あら、私には??」

「……ったく」

残りもサクラに渡す。チョコが無くなってしまったヒナタは

「じゃあねえ、ヴァジュラでも食うか」

そう言つて、ヴァジュラをむしゃむしゃと食べ始めた

「ちよ……オラクル細胞に捕食されちゃいますよ!??」

「へーきへーき、そろそろ追いつくから」

そういつて食べ続けるヒナタの後ろに、ふよふよと何かが飛んで行く

「「サリエル!?!」」

二人は銃形態に変え、同時にバレットを放つ

「おいおい、良く見る、こいつは・・・まあアラガミなんだけどな」
ヒナタは信じられないスピードで二人の銃口を剣で逸らしてアラガミを守る

「ヒナタ!! あんたそれ・・・」

「紹介しよう。俺の相棒の、ナファイオだ」

良く見るとサリエルはとても小さく、ヒナタの頭の上にちょこんと座っている

「相棒って・・・アラガミがですか!？」

アリサは驚きを隠せないようだ。本来アラガミとは無差別に捕食する細胞の集まりだ。他の生物と、それも人間なんかと一緒にいることはまずあり得ない

「ナファイオ・・・ちゃん」

「ファイ」

アリサが恐る恐る名前を呼ぶとナファイオは嬉しそうにヒナタの頭の上をふよふよ飛び回る

「ナファイオはほかのアラガミと違って人間を捕食しない、こいつが喰うのはほかのアラガミだけなんだ」

そう言つてヒナタは手を広げる。手の上の空間が歪み、一瞬まばゆい光を放つて四角いブロックが出現する

「でも見ての通りこいつは小さい。そのせいで単体だと満足に喰えないんだ。そして俺はアラガミを喰って再構成できる。つまりこのブロックは俺が喰ったヴァジュラの一部をナファイオが食べやすいように再構成した代物だ。ほれ、ナファイオ、オヤツだ」

ブロック状のものを自分の頭の上に持つていくヒナタ。するとナファイオは嬉しそうにそれを受け取り、小さな口でパクパク食べ始めた

「あの・・・ナファイオちゃんは・・・」

「こいつは成熟した固体だ。まあ、その中でも群を抜いてちっちゃいんだけどな」

「なるほど・・・可愛いですね」

そう言つてナファイオを撫でようと手を伸ばすアリサ

「ファイー!!」

ナファイオは半分になったブロックを持ったまま、アリサの指を啜えた
「・・・へ??」

一瞬の静寂、それを切り裂いたのは・・・

「ナファイー・・・それやるのは俺だけにしろって言つたる。初めて見る人は驚くからさ、喰われたつて」

のんきに話すヒナタだった

「ヒナタ!!こつこれ・・・」

「平気だ、ナファイーは治療しているだけだ」

「治療???」

アリサとサクラは同時に首をかしげる

「アリサ、お前指に怪我してたる」

「そう言えばヴァジュラ斬ったときにかすかに痛みが・・・」

「それをナファイーが治療してるんだ」

そうこつ言つてるうちに治療は終了。ナファイーはアリサの指を吐き出し、食事を再開する

「ほんとだ・・・きれいになつてる」

「まあそんな所だな・・・」

くピピピ!!ピピピ!!ピピピ!!

「あ、通信が入っていますね」

「こちらサクラ、アリサと任務を終わらせて帰るとこなんだけど?」
「?」

『ごめん!!帰るとこ悪いんだけど・・・応援を要請する!!』

通信機越しに聞こえる声は焦っているように感じる。アラガミに苦戦でもしているのだろうか

「どしたの。あんたが苦戦なんて」

『さすがにウロヴオロス3体を一人ではきつい』

「そりゃそうだわ。場所は??」

『そこからちよつと南に行つたところだ。頼む』

「あいあい、すぐ行くから、死ぬんじゃないわよ??」

「サクラは通信を切り、アリサに向き直る

「リュウが苦戦してるみたい。いくわよ」

「苦戦??どいつに」

「ヒナタがアリサの隣に立つ

「ウロヴオロスよ」

「行くぞナフィー。食事の時間だ」

「ちよ・・・行かつて」

「アリサが止めようとするが

「ウロヴオロスはナフィーの好物だ。行かないわけにはいかない」

「だからつて・・・」

「アリサは渋るが

「いいわよアリサ、一緒に来させましょう。ただし、戦闘中は私の

指示に従うこと、良いわね??」

「ああ、構わんぞ」

「ならよし。行きましょう」

南に向き直るサクラ、それを見てヒナタは

「ナフィー、三人ならいけるか??」

「フィー!!!!」

任せて。ナフィオは目でそう言っている

「そつか、後で一杯喰わせてやるよ」

「フィフィフィー!!!!」

マジ!? やつた!!。そんな感じで喜ぶナフィオ。ヒナタは二人の

腰に手を回す

「きゃあああ!!!??!?!?!」

「ヒナタ!?まさか発情した!?!」

「するかダアホ!!!飛ぶんだよ!!!」

ヒナタの背にナフィオがくつつく、そして悪魔のような大きな翅を広げ、三人を空の世界へといざなう

「行くぜ!!!」

「きゃあああああ!!?!?!?!?!?!」

何度もやっているので慣れていくヒナタと違い、すぐ下に地面が広がっているために恐怖を味わっている

二人は終始叫びっぱなしだった

1話 少年は、二人の少女と出会う(後書き)

どうでしたか??

次回はリュウくん登場とヒナタ無双回です

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8415v/>

G O D E A T E R ~ 二刀持ちし少年 ~

2011年10月8日23時30分発行